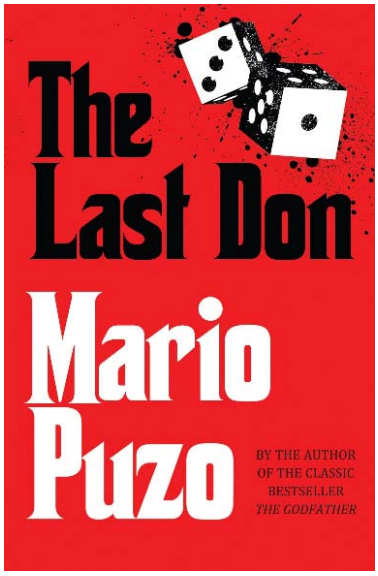
走り読み文学探訪リバイバル(その35)

「ラスト・ドン」　マリオ･プーヅォ　訳　後藤安彦

紹介者：榎本博康

[紹介]



クレリクーツィオ･ファミリーのドン･ドメニコは、サンタディオ･ファミリーとの大戦争が終わった1年後に、血縁の子供達、孫のダンテと甥の子供のクロッチフィクシオ(愛称クロス)の洗礼式を行い、また重要な決定を下した。それはマフィアとしての活動を表面上消滅させ、合法的な事業家集団に転じる長期戦略であり、息子達を含む関係者に具体的な命令を下した。

そして25年後の1990年である。アカデミー賞授賞式に来た「世界一の美女」アシーナ･アキテーンに、群集に混ざった男が近づいて顔に水をかける。別かれた夫であった。次は酸をかけて女優生命を絶つというメッセージである。彼女はひどく怯えて、撮影中の大作映画を中途で降りると決断する。ラスベガスのザナドウ･カジノ･ホテルを相続していたクロスは、彼女を保護し、彼女の映画への復帰を図る事で、映画事業へ進出しようとする。

一方、いとこのダンテは将来のドンの後継者として嘱望されながら、非常に危険な性格が頭をもたげてくる。ダンテとクロスは幼い頃からのライバルであったが、彼らの軋轢は深まる。既に80歳を越えているドンは彼らをどう導くのか。

[感想]

題名に惹かれてしまった。題名の「The Last Don」は「最後のドン(首領)」だが、どうしても「最後にゴールインするドン」を連想してしまう。つまり私の走友のドン･マックネリ氏（米国ニューヨーク州ロチェスター市）は高齢であり、最近はマラソン大会でいつも最後にゴールインしているのだ。彼は今年(2000年)の秋に80歳の誕生日を迎え、生涯568マラソン、70歳以上297マラソンの記録を打ち立て、さらに走り続ける姿からは、lastが動詞として用いられる場合の意味である「持続する」を思い出して、「ドンは永遠に走り続ける」というメッセージも感じてしまう。

本書は「ゴッド･ファーザー(1969年)」の続編と考えられる作品であるが、前作が1920年代からのマフィア勃興期の物語であるのに対して、本書は1990年代を中心としたマフィアの合法化、社会への浸透の課程を描いている。時代が違うのだが、読んでいて映画「ゴッド･ファーザー」のテーマ音楽が頭の中を占領してしまう。完全にのめりこんだ。

ランニング文学としては、まず走りを語りたい。アシーナは水をかけられた事件が起こったアカデミー賞授賞式の夜、パーティには出席せずに帰宅し、眠られぬ夜を過ごした。翌朝、彼女は白のショートパンツを穿き、テニスシューズを履いて、太陽が地平線に昇るのを見ながら、

Copyright © Enomoto PE Office, all rights reserved.

彼女の住まいであるロス･アンジェルス市マリブの海岸沿いに走った。走りながら気持ちの葛藤があり、それを振り切るようにスピードを上げ、浜辺の果てで息を切らし、カモメの滑空を見ながら孤独に耐え、そして全ての気持ちを吹っ切って決断をし、あとはそれを実行するだけの強い彼女となって家に戻った。午前10時である。

アシーナの決断は、撮影中の大作「メッサリーナ」の仕事から降りるというものだ。既に巨費を投じた映画をごみくずとし、彼女自身の映画生命をも完全に断ち切るものである。彼女は卑劣な性格異常者である前夫から逃れて自分と娘を守るために、私にはとてもできないような決断をした。この決断の深さは本書を読み進むうちに明らかになってくるが、本書の始めの部分で、彼女の無謀としか見えない決断を読者に納得させるためには、プーヅォは彼女を疲れ果てるまで走らせることにしたのだ。迷った時にはまず走ろう。

このストーリーの中で、重要な役割を果たす脇役に、モリーという凄腕の女性弁護士がいる。同じく私の走友にもシカゴで成功した女性弁護士がいて、どうしても彼女を重ね合わせて読んでしまう。

実質的な主人公のクロスは、正確にはクロッチフィクシオ(Croccifixio)だが、この名前から、イエス・キリストの磔(はりつけ)を意味する、ラテン語のCruci　Fixus(クルーチ･フィックスス)、英語のCrucifixを連想した。イタリア語ではどうなのだろうか。しかしクロスは、イエスではなく、その父のヨセフの役を、この小説では負っている。つまり、マリアの子イエスならぬ、アシーナの連れ子を守り育てるのだ。この現代のサグラダ・ファミリヤ(聖家族)は、これからどのような運命に遭遇して行くのであろうか。それを語る資格のあるプーヅォはもういない。

ドン・ドメニコが目指していた最大の目標は、スポーツ賭博の合法化である。闇の世界の仕事を国家事業とすることである。それはネバダ州だけで合法化されていた。この濡れ手に泡の事業を手に入れるためにネバダ州知事を買収し、また彼を上院議員とし、あわよくばその男を大統領にすることも視野に入れて操っている。日本でも、このたびサッカー籤が始められたように、この潮流は止めどもないようだ。

(初稿2000.11.11)

[リバイバル感想]

これを書いたころには思ってもいなかったが、2016年12月に統合型リゾート(IR)整備推進法案、通称「カジノ法案」が成立した。ながらくカジノが違法であった日本で、合法化されるのだという。主は統合型リゾートでありカジノはその一部に過ぎないとの説明があるようだが、その他のショッピングモールやホテル、国際会議場・展示場、複合娯楽施設（劇場、映画館、遊戯施設など）は現行法制でも可能なわけで、事実、例えば横浜のMM地区を見れば、さらに美術館やコンサートホールもあり、ディナークルージングも楽しめ、カジノ以外は既に完璧以上に整っており、今年は観光ゴンドラまで営業を始めたので、やはりこの法案はカジノが主役と思える。MM地区は家族向けの空間でデートコースでもあるが、そこにカジノが入るとどんな様相になってしまうのだろうか。

そして既にIR汚職事件（またはカジノ汚職事件）も発生して（または発覚して）公判が進

Copyright © Enomoto PE Office, all rights reserved.

んでいる。利権を巡る画策は我々の知らない所で今も進んでいるのだろうか。

本書に描かれた姿がカジノの典型かどうかは知らないが、その運営の裏側が生々しく描かれている。もしもそうであれば、治安が悪くなるのは避けられない。東京湾の魚のエサが豊富にならないで欲しい。

所で本文で指摘したサッカーくじは、今ではスポーツ振興くじ（toto・BIG）だが、始まった初年度(2001年度)の売上643億円から2006年度には135億円まで減少したが、以降はtoto売り場に加えて販売チャンネルの拡大（コンビニでの一般販売、インターネット販売）と新しいくじの開発により、今では1千億円程度の売り上げとなっている。ちなみにインターネットが８割に迫る。MEGA BIGで１等12億円が出るなど、従来の宝くじには無い高額当選が出ることから、人気を集めているという。

JAPAN SPORTサイトの説明では、50%が当選払い戻し金、経費と特定金額（何？）が引かれた収益の3/4がスポーツ振興、1/4が国庫納付ということである、この詳細は専門家の分析にゆだねたいが、経費が200億円と仮定し、なぞの特定金額が100億円とすると、残りが200億円。するとスポーツ振興には150億円であり、たいした金額では無い。

なお宝くじの売上は全部合わせて2019年度に7931億円とのこと。

(2021.7.24)

Copyright © Enomoto PE Office, all rights reserved.